

クラシック音楽は僕の人生にとって、
まさに「心の糧」なんです。



ヴァイオリンを演奏することだけでなく、水彩画を描くことも趣味だという中嶋さん。海外に行ったときはスケッチを描いて楽しんだりもしている。

中嶋 嶺雄

従兄がヴァイオリンを弾いていた
り、両親の理解もあつたりで、小
学校4年生の冬から松本音楽院の
鈴木鎮一先生の第一期生としてヴ
ァイオリンを習い始めました。そ
のためにクラシック音楽には子供
の頃から慣れ親しんできました。

若い頃は、とかく思想性を聞い
かけてくるような、人生とは何か
をつきつめて考えさせてくれるよ
うな音楽を求めていました。その
中でも深く感銘を受けたのが、チャ
イコフスキーの交響曲『悲愴』です。

そのレコードと、その当時、近
所の人は誰も持っていなかった電
気蓄音機を、親が経営する薬局の
手伝いをして貯めたお金で買いま
した。自転車で松本から20km離れ
た北アルプスの登山口まで葉の訪
問販売に行く厳しいアルバイトで
した。ですからやっとなレコードと
電気蓄音機を手にしたときのうれ

自宅には、クラシック音楽を聴いたりヴァイオリンを演奏するための
天井の高い吹き抜けの部屋がある。ひとりで楽しむことはもちろ
ん、友人や家族が集まって演奏を楽しむ憩いの時間には、臨場感
あふれるメロディーが響きわたる。



しは忘れられません。中学生の
頃といえば誰でもそうかもしれま
せんが、とても感傷的だったとき
で、曲を全部暗記してしまうほど
耳を研ぎ澄まして聴いたもので
す。

ところが高校1年生のときに、
家業の失敗で家も家財道具もすべ
て手放さなくてはならなくなつた
のです。そのためせっかく買った
電気蓄音機も取られてしまうこと
になりました。今までの恵まれた
生活が暗転した出来事でした。そ
んなときにもチャイコフスキーの
『悲愴』は心の底で鳴り響いていま
した。

それほどまでに親しんだ『悲愴』
ですが、実は今はほとんど聴きま
せん。若い頃と今とでは聴く曲が
大きく変わっているんですね。大
学の学長として、分刻みのスケジ
ュールに追われている生活をして
いると、大きなドラマが展開する
ような、人生の意味を求めるよう
な曲ではなく、心に和みをもたら
してくれよう曲がいいのです。
心が和むといったらなんといつても
モーツァルトが一番です。

クラシック音楽の聴き方は人ぞ
れぞれによるのでしょうけれど、

どこから入ってもよいのが実はク
ラシック音楽なんです。仕事で疲
れた心を癒すにはモーツァルトが
お勧めですが、バッハやヴィバルデ
イなどのバロック音楽もよいと思
います。また総合芸術としての音
楽性を求めるなら、ベートーヴェ
ンやブラームス。若い人ならマー
ラーあたりもよいと思います。

今でもヴァイオリンはしょっち
ゅう弾きます。自宅には音楽の演
奏用に作られた吹き抜けの部屋が
あり、この部屋で一人ヴァイオリ
ンを演奏することはもちろん、時
には家族そろって演奏したり、松
本音楽院の同窓生とアンサンブル
したりもします。疲れて帰つてき
たときや休日、ここでヴァイオリ
ンを弾いたりクラシック音楽を
聴くのは、心から安らぐひととき
なのです。この空間で音楽を楽し
む時間があるからこそ、毎日の多
忙な生活を活動的にこなしていけ
るのだと思います。

●なかじま みねお

1936年松本市生まれ。現在、東京外国語大学
学長。主な専攻は中国現代学・国際関係論。評論
家としてももちろん、プロ顔負けのヴァイオリン
愛好家としても知られる。著書は『北京烈烈』な
ど多数。